

江戸時代初頭における煤鼻（裾花）川の開発形態に関する研究*

A Study on the development of Susohana River in the beginning of the Edo period

宮下 秀樹**

By Hideki MIYASHITA

概 要

裾花川末流部は、近世初頭に松平忠輝とその家臣団により大規模な河川改修が行われている。しかしこれらのことは口碑伝承のみで確かな史料が存在しない。昭和初期からの近代的な河川整備と沿岸地域の都市開発の進展により、現在の裾花川流域には、慶長期の河川構造を確認できる痕跡は少ない。本稿では、地元が存在する江戸時代の文書と、大正末期の長野市全図で確認できる河道の姿に明治初期の行政文書を加味して、帰納法的に慶長期における煤鼻川開発初期の形態の同定を試みた。その結果、煤鼻川は二線堤構造や霞堤を左右両岸に配置した甲州流の治水技術の流れを汲む工法が用いられていて、甲州系代官衆らにより用意周到に準備された一大開発であったと推定できる。そしてこの改修事業は、新田開発が目的ではなく、善光寺平の利水と治水（洪水）対策が主な目的であったと考えることができ、治水機能が完備されたことで、旧煤鼻川氾濫地帯に北国街道丹波島・善光寺宿ルートが慶長16年に開設されている。

1. はじめに

旧長野市街地西方を流れる裾花川（計画高水流量600 m³/秒、縦断勾配1/140）は、長野県庁西脇の通称白岩と呼ばれる朝日山山麓先端より南流し犀川に合流している。この間の3 kmに満たない河筋は人工的に造られたものであることは良く知られている。今から400年以上前の煤鼻川（近世では裾花川をこのように表していた）は、図-1に示したように現在の県庁敷地を東流し長野市庁舎の南側を通り、七瀬、南俣方面に流れていたといわれる。当然往時の煤鼻川は、堤防もなく扇状地内の微低地を乱流していた。その旧河道の一部が、八幡川・古川・計湯川や宮川といわれる。

乱流する煤鼻川の流れを現在の姿に改修したのは、花井吉成・義雄父子といわれる¹⁾。時代は、慶長8年から元和元年（1603～1615）の間である。関ヶ原の戦いの後、天下を治めた徳川家康は、その六男である松平忠輝に川中島四郡（善光寺平を含む地域）を与えた。花井吉成は、家康が忠輝に附けた家臣で松城（現在の松代）城代、後の松平遠江守ある。その跡を継いだ義雄は主水の仮名（けみょう）で知られている。

大阪夏の陣での遅戦・怠戦と将軍秀忠軍との間で起きた不祥事に対し家康は忠輝を改易し勘当したが、花井主水も連座し改易・配流された。忠輝の川中島統治時代に松城城代であった花井父子は、煤鼻川の開発の他、鐘鋳堰、犀川三堰等の改修を行い、水内、更級の治水と灌漑事業に尽力したと伝えられる。

また、江戸時代中期以降に作製されたと思われる、善

光寺平を流れる河川の往時の姿を現した「川中島平乱流絵図」²⁾には「堀川九百間余慶長八年花・主水裾花川決通シ犀川に注水」とある。

しかしこれらの実績は、口碑伝承のみで確かな史料が無く実態は定かでない。そのようなことから、煤鼻川の開発が実施された時期は謎とされている。近年では、慶長期前後の煤鼻川氾濫地域の検地石高に大幅な変化が無いこと、善光寺門前町の南側を流れる鐘鋳堰の川筋が慶長以前に行われた村切りでの村境と一致することを理由に、煤鼻川の改修はその以前より行われていたものを花井父子が、その総仕上げをしたのではないかとの見解が主流となっている³⁾。

昭和初期からの近代的な河川整備と沿岸地域の都市開発の進展により、現在の裾花川流域には、慶長期の河川構造を確認できる痕跡は少ない。そのため、慶長期の煤花川開発初期の形態に関する研究は進んでいない。

そこで本稿では、地元に残る江戸時代の文書と、大正末期の長野市全図で確認できる河道の姿に明治初期の行政文書を加味して、帰納法的に慶長期における煤鼻川開発初期の形態の同定を試みる。そして、この結果をもとに煤鼻川の開発の意義について考察を述べる。

2. 検地帳よりみた慶長期の村々の変遷

忠輝の勘当・改易、花井主水の配流により、当時の大事業を物語る史料は散逸し、現在その存在は認められていない。ここでは、煤鼻川大開発の時期を明確にする目的で慶長期前後の検地史料をもとに、石高の変遷を表-1にまとめた。

忠輝が入封する前の松城城主森右近忠政は、慶長5年2月1日、家康の命によって川中島四郡を領知することになり、同7年（1602）領内の検地を実施した。それに基づき

*keyword：霞堤、二線堤、氾濫戻し、頭水の防止

**正会員 株式会社 守谷商会 品質技術本部

（〒380-8533 長野県長野市南千歳町878番地）

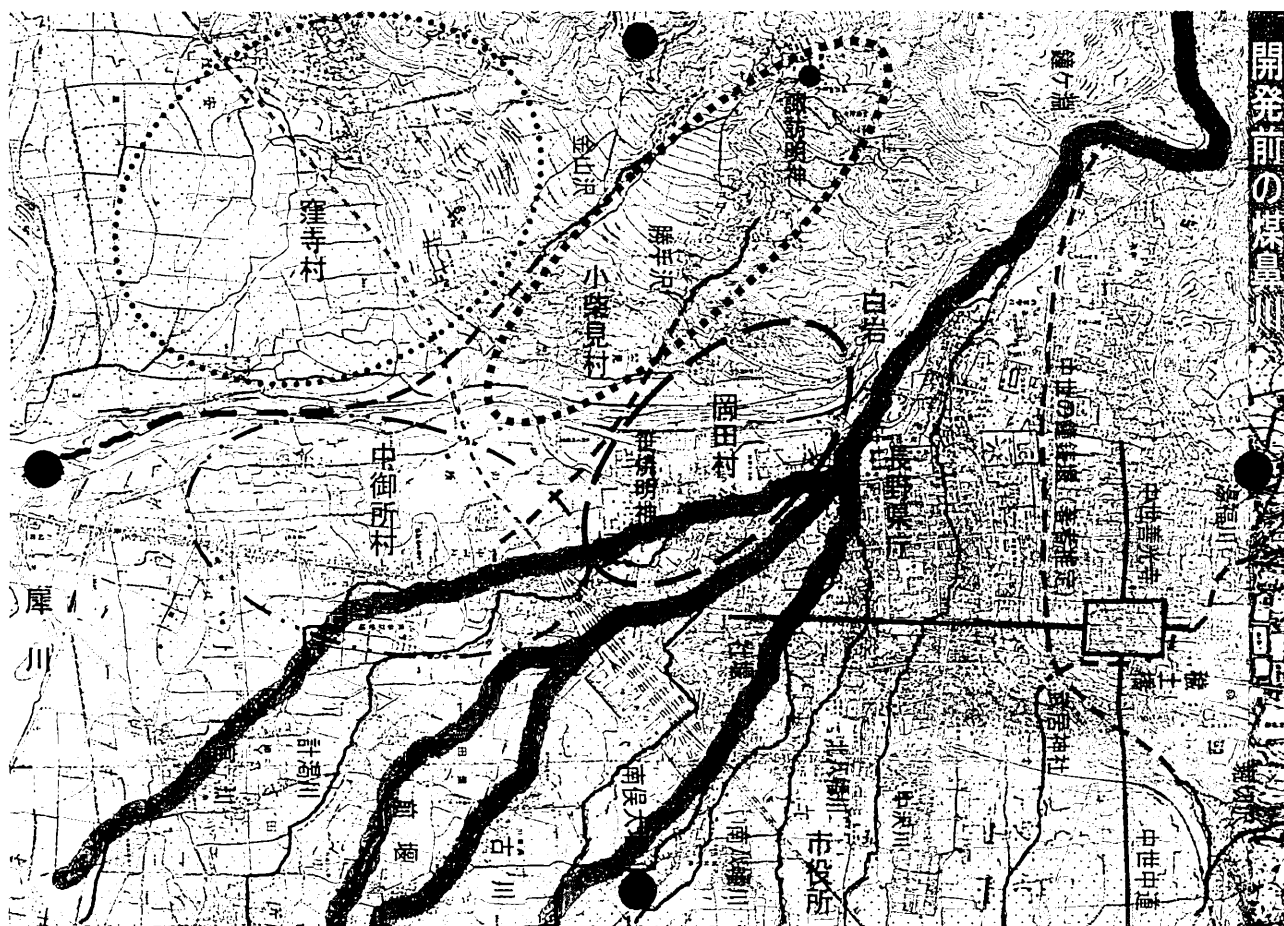


図-1 慶長期開発以前の煤鼻川と周辺の村切り (大正15年測量長野市全図に筆者加筆)

調製されたものが「信州川中島四郡検地打立之帳」⁴⁾である。忠輝入封の一年前にあたる。忠輝が改易されたのが元和元年で、その時に松平忠昌が入封するが、その後元和4年(1618)3月に越後高田城主酒井忠勝が移封されて当地を領した。そのときに幕府より渡された領地目録が「信州川中島御知行目録」⁵⁾である。この16年間に村々の石高がどのように推移したのか注目してみる。

ここで、開発の傾向を明確するために次の三つのゾーンに村々を分け推移をまとめてみる。一つ目は旧河道の北側で河岸段丘上部に当たる部分の村々で善光寺領内の長野村・箱清水村や三輪村および権堂村がそれにあたる。二つ目は新煤鼻川通り沿いの村々で、このゾーンには図-1で示したようにいずれも開発前には煤鼻川の右岸に位置していた岡田村・中御所村・荒木村・小柴見村および窪寺村が含まれている。これが煤鼻川の開発後には図-2に示すように新煤鼻川の右岸に窪寺村と小柴見村および小柴見村から分村された平柴村が位置し、左岸には岡田村を吸収した中御所村と荒木村に加え妻科村が存在した。そして三つ目が旧煤鼻川の氾濫域の村々となる。

慶長7年の右近検地の後、特に変動が大きいのが新煤鼻川通り沿いの村々である。ここで注目したいのが岡田村と小柴見村である。岡田村(387石)は右近検地の後、消滅し以後の検地帳より姿を消すことになる。以後の幾つ

表-1 慶長期前後の村切りの変遷

		信州川中島四郡 検地打立之帳 慶長7年(1602)				信州川中島 御知行目録 元和4年(1618)				松平忠輝統治時代 の増減			
		石	斗	升	合	石	斗	升	合	石	斗	升	合
■ 段丘上部系	長野村	250	0	0	0	250	0	0	0	0	0	0	0
	箱清水村	274	0	3	0	274	0	3	0	0	0	0	0
	権堂村	670	1	8	3	670	1	8	3	0	0	0	0
	三輪村	1,117	5	0	6								
	々善光寺領	69	7	9	6	1,123	5	8	1	- 63	7	2	1
	段丘系計	2,381	5	1	5	2,317	7	9	4	- 63	7	2	1
■ 新煤鼻川通り系	平柴村					69	7	9	6	44	5	9	4
	小柴見村	130	6	2	2	105	4	2	0				
	窪寺村	764	4	1	4	771	5	8	0	7	1	6	6
	右岸系計	895	0	3	6	946	7	9	6	51	7	6	0
	妻科村	631	3	5	1	631	6	8	0	0	3	2	9
	岡田村	387	0	4	5	-	-	-	-	- 387	0	4	5
■ 旧煤鼻川氾濫原系	中御所村	636	1	3	6	557	5	9	0				
	々幕府領	-	-	-	-	80	3	0	0	1	7	5	4
	荒木村	130	2	6	9	130	2	0	0	- 0	0	6	9
	左岸系計	1,784	8	0	1	1,399	7	7	0	- 385	0	3	1
	新煤鼻川通計	2,679	8	3	7	2,346	5	6	6	- 333	2	7	1
	問御所村	183	1	2	0	188	2	2	0	5	1	0	0
■ 旧煤鼻川氾濫原系	七瀬川原村	406	1	7	4	406	1	7	4	0	0	0	0
	栗田村	792	5	7	7	807	5	5	7	14	9	8	0
	市村	436	1	5	6	438	1	2	6	1	9	7	0
	千田村	679	8	6	8	460	1	0	5				
	々幕府領	-	-	-	-	233	6	8	7	13	9	2	4
	南俣村	343	3	1	1	316	9	1	0	- 26	4	0	1
	風間村	402	2	4	7	403	0	8	0	0	8	3	3
	北高田村	904	8	4	5	969	1	2	0	64	2	7	5
	南高田村	964	1	1	8	971	9	1	0	7	7	9	2
	北長池村	472	9	7	2	-	-	-	-				
	南長池村	478	1	4	8	-	-	-	-				
■ 旧煤鼻川系	長池村	-	-	-	-	956	4	8	0	96	4	1	3
	長池新田村	-	-	-	-	91	0	5	3				
	北尾張部村	493	3	1	3	497	1	6	0	3	8	4	7
	西尾張部村	538	3	9	2	541	1	0	0	2	7	0	8
	旧煤鼻川系計	7,095	1	4	1	7,280	6	8	2	185	5	4	1
合 計		12,156	4	9	3	11,945	0	4	2	- 211	4	5	1

かの史料に岡田村の名前が登場するが、正式には中御所村の枝村で岡田組である。ところが、岡田村を枝村に組み込んだはずの中御所村の石高に有意な変化は認められない。消えた岡田村と対照的なのが小柴見村(130石)である。右近検地の後、小柴見村と平柴村とに分割されるが、両村を合わせた石高は175石となり45石ほど増加している。新煤鼻川右岸の村々合わせて52石の増加、妻科村を含めた左岸の村々は385石の減少で、左右両岸合わせて333石の減少となる。

右近検地が行われる一年前の慶長6年7月、家康は善光寺に1,000石の領地を寄進している。又、同8年には旭山を善光寺の造営料所に定めている⁶⁾。これにより旭山のふもとの地を平柴村(69石)と称し小柴見村より分割して、善光寺領であった三輪村橋場組および武井組(69石)と交換している⁷⁾。ところが、橋場・武井組が善光寺領より返還された後の三輪村の石高は増加していない。

一方、旧煤鼻川氾濫原の村々では北高田村で64石、南北の長池村を合併した長池新田村に96石の増加がみられ、旧流域全体で合計186石の増加となっている。このように、新旧煤鼻川を囲む三つのゾーンの村々の石高の推移は慶長期の前後で211石の減少となっていて、煤鼻川改修による新田開発効果を確認することができない。このことが、煤鼻川の開発時期が慶長期以前で有ったとの近年の見解のよりどころとなっていると思われる。

ここで、筆者は先に述べた慶長期に消えた岡田村が新煤鼻川の河道に充てられ、川沿いの村々は新たな村切り

が行われたものと推定している。先に紹介した「川中島平乱流絵図」では、新堀川の長さを900間としている。開鑿された川幅を平均90間と仮定するとその面積は、新煤鼻川通り沿いの村々の減歩と同程度となる。これに対して旧氾濫原の村々で見られた石高の増加は、河道改修による新田開発効果と見ることができる。

よって、煤鼻川の河道改修時期は、岡田村が確認できる慶長7年の信州川中島四郡検地打立之帳以降より、信州川中島御知行目録が調製された元和4年までの間と考えることができ、それは花井父子の実績と考えることができる。

以上のことから、慶長期における煤鼻川の開発による新田開発の成果が顕著でないことをもって、それ以前に煤鼻川はすでに南流していたという見解は適切でなく、煤鼻川の開発は洪水対策が主なる目的で、新田開発そのものが目的ではなかったと考えられる。バイパス河川の築造には新規に膨大な用地が必要となる。それに対して、旧河道の一部は用水路として整備する必要があり、全てを農耕地化することはできない。また、旧河道は乱流定まらないものの平時には何らかの耕作が可能であることから、開発以前の氾濫原の多くの村々では、洪水危険地帯で有るにもかかわらず無理やり石盛りがなされていた可能性がある。これらにより河道が付け替えられたといってもそれが即、目に見えた形で石高の増につながらなかったのではないかと考えている。

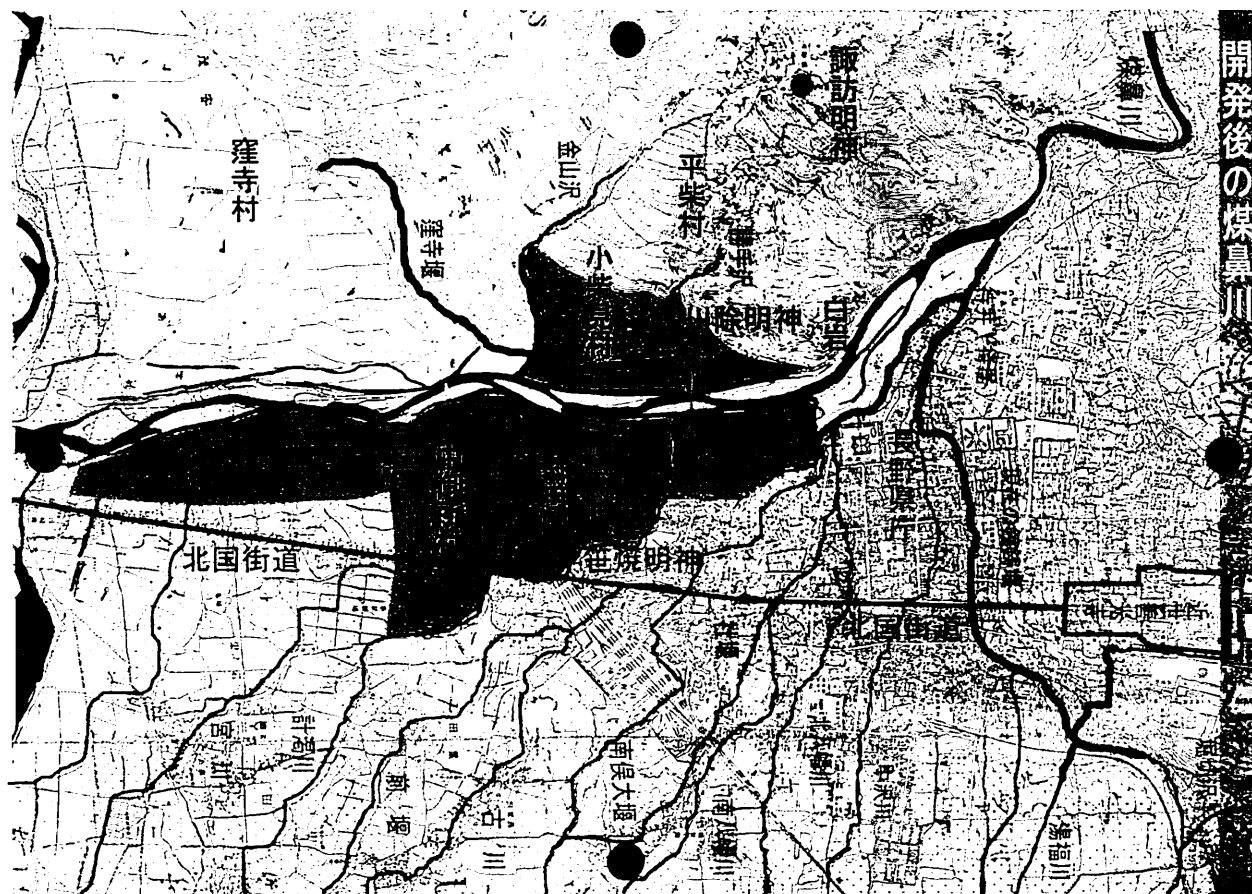


図-2 慶長の開発後の煤鼻川と沿岸の村々(大正15年測量長野市全図に筆者加筆)

3. 消えた岡田村の所在

それでは消えた岡田村はどこに在ったのか。それは少々現在の形と異なっていたのではないかと筆者は考えている。現在の岡田町は、県庁の南側から山王小学校、長野バスターミナルの周辺で裾花川左岸一帯の地域である。往時の岡田村は、これに加えて現在の小柴見区の北半分が岡田村であったと思われる。古来小柴見村ではこの地域を北組（村）と称している。

小柴見村北組には寛政7年（1795）創建の小柴見神社がある。この前年2月に「当村為川除明神様連判人別帳」⁸⁾が小柴見村より松代藩に出されている。これは、「寛政六年まで南組は平柴村明神氏子で、北組は中御所村笹焼明神の氏子であったが、煤鼻川が段々川欠となるので不便を感じ思いつき、諏訪平と称する所に少々の諏訪宮があったものを取り除き、塚六間七間壱拾二歩の所に水害除けを兼ねながら両組み一同の明神として祭りたく御土様に願ひ奉る」という内容の連判人別帳である。

煤鼻川開発以前からの風習で、南組は慶長8年以前まで同一村であった平柴村内の平柴明神氏子で、北組は往時地続きであった中御所村笹焼明神（岡田村の南端）の氏子であり、毎年お礼として両社に酒三升ずつを持って行く慣習が寛政6年まで190年間続いていたといわれる⁸⁾。小柴見村の北組が笹焼明神の氏子であったことが、筆者が煤鼻川開発以前の岡田村の姿を想像する拠りどころとなっている。更に、小柴見村・平柴村から中御所村への出作も多く130石に上ることは、往時は同じ村落であったものが分断されたことが一因となっているのではないかと考えている。

4. 慶長期に再度村切りされた新煤鼻川沿岸地域

村名の初見は太閤検地で、このとき初めて村切りと呼ばれる地域割りが実施され、村落体制が確立したといわれる。北信濃の太閤検地は、文禄4年（1595）の増田長盛の検地と慶長3年（1598）の石川備前守による検地があったといわれるが、煤鼻川沿いの村々の記録は存在しない。

慶長期以前の、岡田村と小柴見村の村境または小柴見村と窪寺村の境はどこであったのかを考えると、小柴見村を流れる沢筋の様子は大いに参考になる。多くの村々の村切りは街道、川筋あるいは堰等の地理的要素により分割されるのが一般的であるので、旧沢筋や古道の位置推定の意義は大きい。

図-2に見るように小柴見村には、朝日山山麓より勝手沢と金山沢という急流河川が流下し、煤鼻川に流れ込んでいる。この2つの沢筋が、平柴村より小柴見村に入ってから不自然の流路となっている。つまり2つの沢筋は人為的な手が増えられ、かなり不自然な流向を示しているのである。勝手沢は平柴村中屋敷地先の谷を刻み小柴見村境まで東南東に流下するが、小柴見村城ノ腰でほぼ直角に折れ北東に段丘上を迂回して煤鼻川に注いでいる。これは地形的に見て人為的で、かつかなり無理をして造った沢筋であることがわかる。この付近は、長野盆地西縁断層帯に属する小柴見断層が北東～南西に走っていて幾

つかの段丘を造っている。沢の流れは段丘斜面の等高線に直交して流下するのが自然であり、往時の勝手沢もそのように流れていたものと想像できる。（図-1参照）

勝手沢の南に位置する金山沢は、土砂の押し出しが大きく、窪寺村と小柴見村の境界付近に発達した扇状地形を形成し、その東端は中御所村まで達して漆田ヶ原と呼ばれた微高地を形成している。この扇状地の北端は勝手沢の流路域にまで達して、勝手沢の流れは遮られていた。金山沢の扇状地で流末を封じられた勝手沢は水はけが悪く、しばしば小柴見・岡田境に滞水していたものと考えられる。

金山沢もまた扇状地の等高線に直交して流下することなく、小柴見村西南端で45度ほど折れ曲がり東流して窪寺村との境をなしているのである。この小柴見村に接する流路の内、下流側の過半は人工的に盛土をした上に沢筋が付けられていて、沢が人工的に付け替えられた可能性が大きい。

ではなぜ、勝手沢、金山沢が流末部の小柴見村で人工的に付け替えられたのかを考えてみる。付け替えられた新煤鼻川右岸地域の灌漑用に、堤内水路としての窪寺堰（当地では田用水路そのものを堰と呼ぶ）が慶長19年に完成した⁹⁾。これは煤鼻川開発事業の関連工事の一つで花井父子の実績と考えられる。このころに新煤鼻川の一連の大工事は完成したものと推定できる。窪寺堰は新設された煤鼻川最上端の白岩直下で取水され、小柴見村を流下して窪寺村の耕地を潤すものであった。この窪寺堰は途中で、勝手沢、金山沢と交差するのである。この交差部は底樋と呼ばれる立体交差構造となっており、沢が上を流れ堰がその下を横断している。この立体交差構造を実現するために、両沢筋を大きく迂回させて盛土構造をとり高低差を稼いでいるのである。

慶長期にこの立体交差構造がすでに完成していたか否かは不明であるが、明治初期の安茂里村誌¹⁰⁾には、「久保寺堰、裾花川北堤水門より起こり、沢五箇所各底樋を以て通し本村久保寺組の田用水に供し下流、犀川に入る」とあり、創設期にはすでに底樋構造が採用されていた可能性は大きい。

岡田村は、中央部が新河道となり分断された。残った土地は、新河道敷に土地を供出した、中御所村、窪寺村および小柴見村に分配された。中御所村には、煤鼻川左岸の岡田村残地が直接宛われた。窪寺村は岡田村と地続きでないため小柴見村の南端の旧金山沢と付け替えられた新沢筋の間の土地が換地されたものと考えられる。この地域は窪寺村差出組と呼ばれ、全国的にも珍しい地名だといわれる¹¹⁾。

小柴見村は、岡田村の右岸残地を引き受ける代わりに、平柴村の分割や窪寺村への差し出を行ったが、新河道敷の潰れ地が比較的少なく、45石の増加となったのではないかと考えている。

このよう慶長期の煤鼻川の開発は、周辺の沢筋の付け替え、用水堰の新設、村落の集合形態の再編を綿密に考え周到に計画された一大開発事業であったことが伺える。

5. 煤鼻川の河川構造

前述のごとく慶長期煤鼻川の開発の全容は記録になく不明である。そこで、本稿では大正末期の長野市全図から読み取れる煤鼻川流域の堤防地形をもとに、明治期の行政文書¹²⁾¹³⁾に残された煤鼻川堤防の史料を加味して作製した図-3をもとに、慶長期の煤鼻川の姿について検討を行う。なお堤防の呼称は明治4年の真田家文書¹⁴⁾による。

先に述べたように「川中島平乱絵図」には「堀川九百間余慶長八年花・主水裾花川決通シ犀川に注水」とあるので、慶長期の開発範囲の南限は、白岩から900間の位置にある現在のJR信越線裾花鉄橋付近と推定する。

a) 右岸地域の構造

図-3の左端には、煤鼻川右岸最大級の堤防である葎ヶ淵堤がある。この上流には朝日山南麓より流れ下る金山沢が煤鼻川に合流している、これは霞堤を形成している。金山沢合流点の上流には、勝手沢を挟んで勝手沢南堤と北堤が白岩まで築かれている。

この白岩付近より取水した窪寺堰が勝手沢北堤の西側に存在する小柴見断層の裾を流れている。この断層崖は天然の控え堤を形成しているのである。窪寺堰は前述のように勝手沢を底樋で抜け勝手沢南堤の西側を流れ、金山沢の交差部に向かっている。この間の窪寺堰の東側つまり煤鼻川よりには比高1メートル余の段差が堰と並行して存在し、この間の窪寺堰が盛土上に構築されたことがわかる。この盛土が勝手沢南堤の控え堤となっている。

勝手沢北堤および南堤の連続堤は、図-4に示した文政期(1819～1829)の御普請所絵図(村田家文書)¹⁵⁾によりその存在を確認できるが、それ以前の文化7年(1807)和談成立絵図(村田家文書)¹⁶⁾では、断片的に小さな独立堤が5か所確認できる程度である。つまり、慶長期には

右岸の第一線堤(本堤)が築造されていたかどうかは不明であるが、慶長19年には窪寺堰が完成していることから、小柴見断層崖と窪寺堰の盛土からなる控え堤構造は完成していたものと考えることができる。

当地では、この第一線堤と控え堤とに囲われた耕地を割り地と称している。これは水害常襲地帯で良くみられる地割慣行地を指しており、明治初期の小柴見地区の公図にその様子を見ることができる。この地割慣行地の跡が、煤鼻川右岸地域の開発範囲である。

窪寺堰は、金山沢の下を底樋で交差し金山沢が形成した扇状台地を等高線上に進み窪寺村の耕地を潤している。先に述べた窪寺堰の盛土構造は、この金山沢の扇状台地に摺り付けられ、それより南側の控え堤の役目をこの台地が担っている。そして、最南端に位置する葎ヶ淵堤もまたこの台地に袖を摺り付けられている。これらにより白岩から葎ヶ淵堤まで煤鼻川右岸域の控え堤の機能は連続されているので、部分的にしか存在しなかった第一線堤の背後の堤内地に洪水が越水しても、最下流に控える葎ヶ淵堤には、氾濫水を元の煤鼻川本流に複水させる氾濫戻し¹⁷⁾の機能が整備されていて、下流の窪寺村水田を流下洪水氾濫流から守る頭水の防止¹⁸⁾を担っていた。

b) 左岸地域の構造

再度図-3により葎ヶ淵堤の対岸やや上流左岸をみると、横捲り堤と称される霞堤が存在している。その延長はかなり長く旧長野工業高校敷地付近の下岡田地籍まで及んでいる。これより上流側に幾重にも配置された堤防の背面を越水した洪水が、中御所村本村に向かうことがないように、内水を煤鼻川本流に横に捲っている。まさに名が示す如き氾濫戻し機能を有する重要な堤防である。

その上流には、中丁場と称される第一線堤と控土堤と

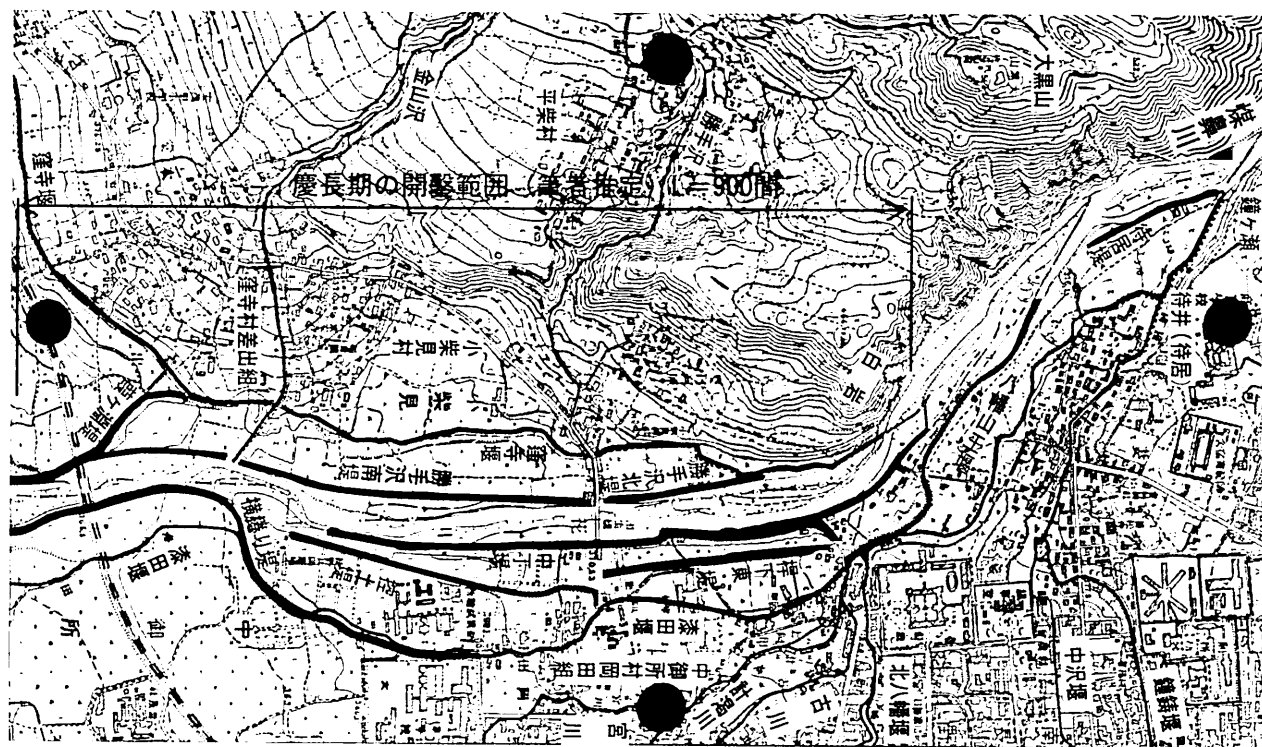


図-3 慶長期煤鼻川の開発範囲 (大正15年測量長野市全図に筆者加筆)

【下段】文政期の御普請所絵図
(村田家文書)¹⁵⁾
2006年筆者撮影

これらの内、一部の川除け堤の普請は国役普請として施工されている。

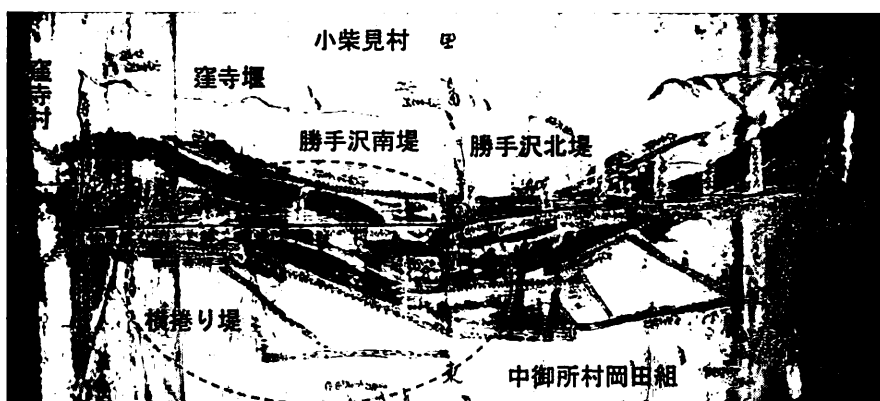
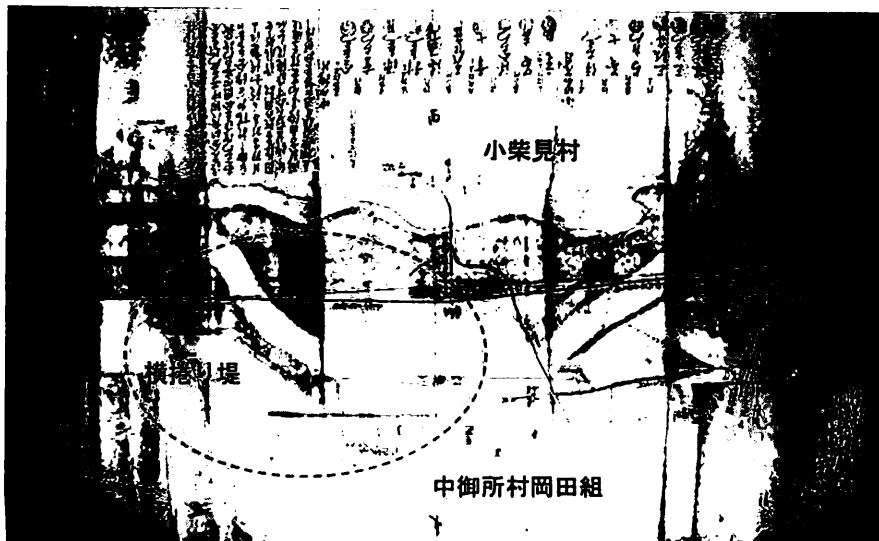
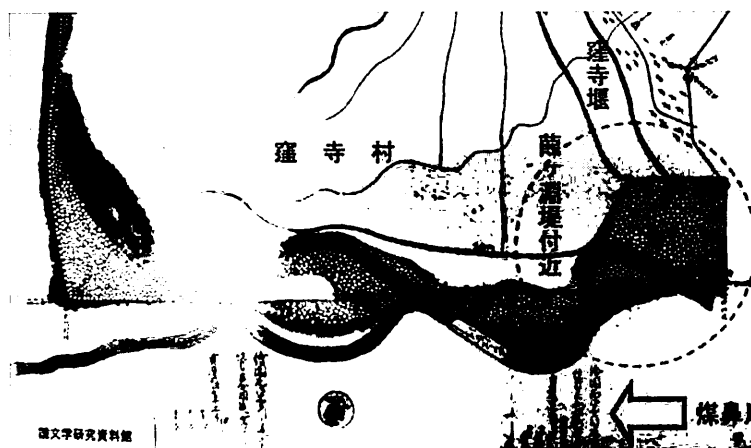


図-4 文化～文政期における煤鼻川上流部の川除け堤の復旧状況



このように左右岸で濫戻し、頭水の防止の機能が発揮されていたことが伺える。

【下段】
宝暦7年煤鼻川並御料私領絵図
(三戸部家文書)²²⁾ 2012年筆者撮影

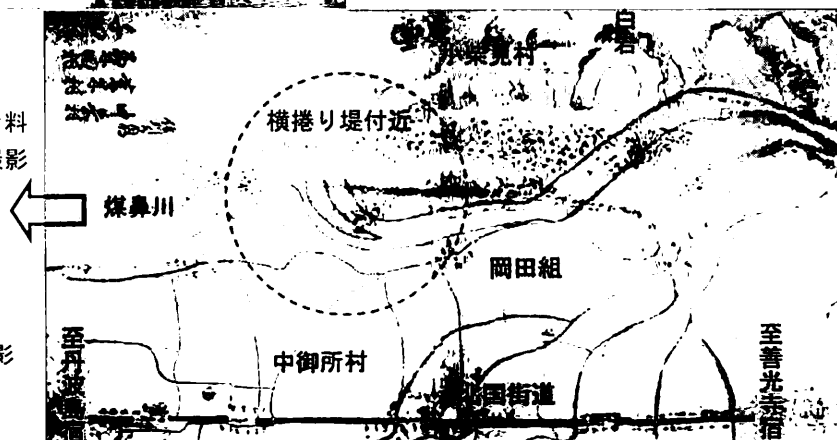


図-5 寛保2年戌の満水から十数年後の煤鼻川の様子

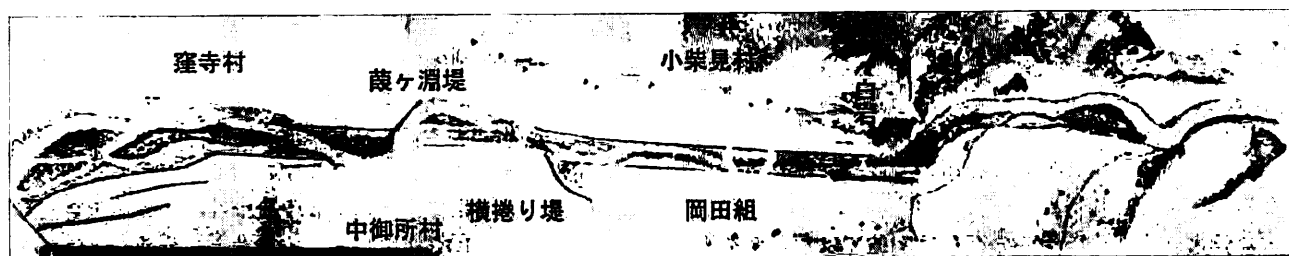


図-6 嘉永5年煤鼻川妻科村分地龍王ヨリ犀川落合久保寺村ノ内米村迄絵図面（長野市立博物館所蔵浦野家文書）²⁰⁾ 2009年筆者撮影

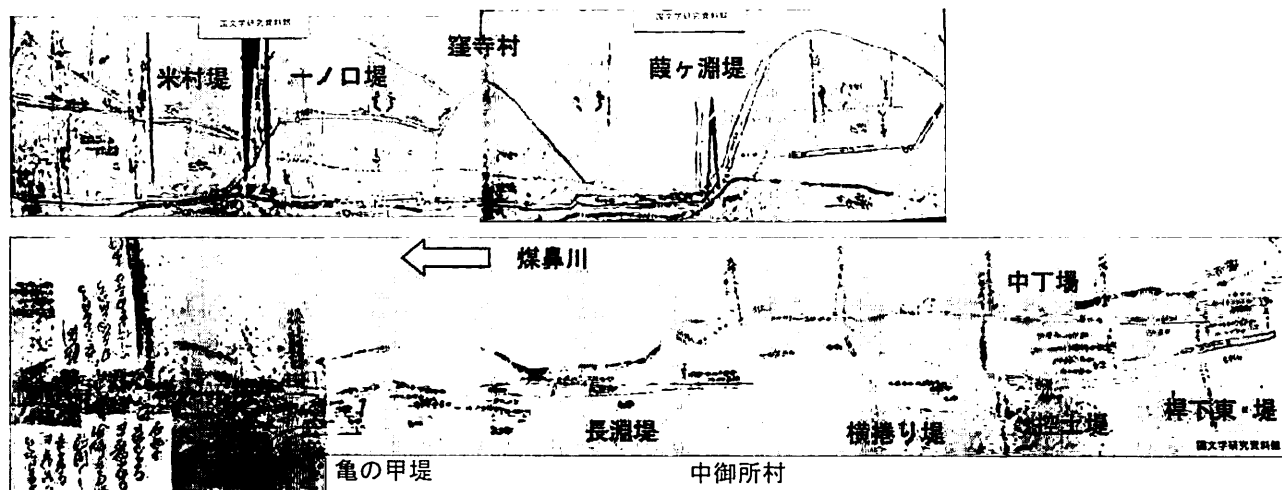


図-7 慶応期の洪水に対する明治4年堤川除普請絵所図（人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵真田家文書）¹⁴⁾ 2006年筆者撮影

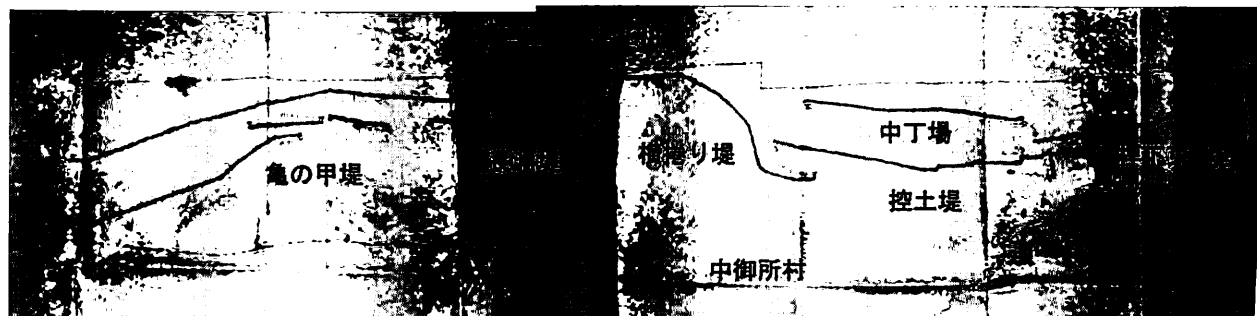


図-8 明治20年の道路河川堤塘取調で調整された堤塘図（長野県立歴史館所蔵行政文書）¹²⁾ 2007年筆者撮影

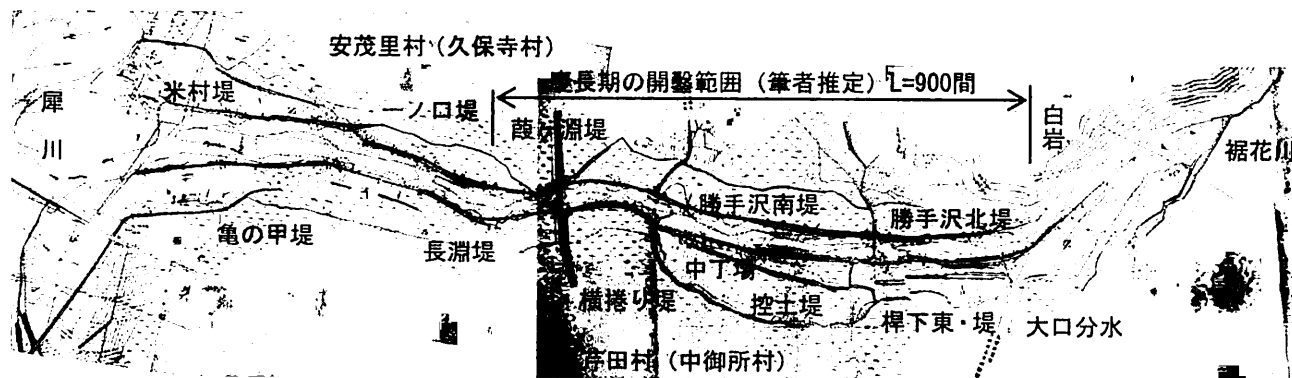


図-9 明治33年裾花川平面図（長野県立歴史館所蔵行政文書）¹³⁾ 2007年筆者撮影

呼ばれる第二線堤が築かれていた。この二線堤構造は断続しながら上岡田地籍まで続いている。

これらの控え堤の東側には大口分水で分流された漆田堰が流れていて、堤内水路を形成している。漆田堰もまた窪寺堰と同様に慶長期の煤鼻川の大開発により整備されたものと考えられる。

大口分水より上流の堤防の存在は明確ではないが慶応期的小林家文書¹⁹⁾によると、このあたりに矢乃羽堤と呼ばれる堤防が存在していたようである。名称から考えて、何本かの短い雁行堤が平行に配置されていたものと思われる。ここは煤鼻川の本流を人為的に南向きに変えた白岩の対岸にあたり、堤防に加わる洪水時の水衝が最も大きかった地点である。

慶長期煤鼻川の開発地域の最北端は、煤鼻川が溪谷を流れ下り善光寺平の扇状地の扇頂部左岸を形成する鐘ヶ瀬と称される河岸段丘崖の裾である。ここで鐘鑄堰と呼ばれる旧長野市東北部の水田を潤す田用水が取水されている。この鐘鑄堰は、しばらくの間河岸段丘の裾を東に流れるが、その途中に待居と称される地域で、八幡山王堰を分水する。待居とは待井の事でまさに分水施設そのものの名称である。ここで分水された八幡山王堰は、妻科村の本郷の西側を下り、聖徳地区の河岸段丘下端の巾下と称される低地を流れ大口分水に至る。鐘鑄堰の取水口から大口分水までの左岸上流部分は河岸段丘が控え堤の役割を果たしていて用水路は堤外水路を成している。

この左岸上流部分の第一線堤は待居堤と呼ばれる鐘ヶ瀬の河岸段丘脇の鐘鑄堰取水口下流を固める堤防が存在するが、それより下流には白岩まで第一線堤は存在しない。ここには、鐘鑄堰からの分水路とは別に八幡山王堰の取水部があり煤鼻川本流より取水をしている。慶長期にこの部分に第一線堤が存在したことを示す史料は存在しないが、八幡山王堰の煤鼻川本流からの直接取水は後世の水不足に起因したもので、慶長期の開発では八幡山王堰も鐘鑄堰と共に鐘ヶ瀬より取水されていたものと考えられる。

c) 左右岸を総合的にみた全体構造

以上見てきたように煤鼻川は、左右岸共に二線堤構造を成し、その下流では、右岸の葎ヶ淵堤と左岸の横捲り堤により第一線堤を乗り越えた洪水を本流に戻し河道の流向を固定している。葎ヶ淵堤の存在を絵図で確認できるのは図-6に示した、弘化4年(1847)の善光寺地震で生じた鬼無里村川浦地籍の堰止湖の決壊による氾濫に対する復旧絵図²⁰⁾以降であるが、図-5に示した寛保2年

(1742)の大洪水である戊の満水の14年後の宝暦6年に作成された久保寺村絵図²¹⁾ならびに宝暦7年の三戸部家文書²²⁾に示された煤鼻川の氾濫区域が、葎ヶ淵堤ならびに横捲り堤以北に限定されていて、氾濫戻しや頭水の防止機能が発揮されている。寛保期以前には、川除け普請に国役制度がなく、松代藩単独で大規模な普請を行うことは考えられないことから、慶長期にはすでに葎ヶ淵堤や横捲り堤の基本形が整備されていたと判断することができ、この河川構造は慶長期の開発当時にすでにその骨格

が完備されていたものと考えられる。

右岸の葎ヶ淵堤の下流には一ノ口堤、米村堤が続き、左岸は長淵堤、危ノ甲堤が続いて犀川に合流している。

(図-7, 8, 9参照)これらは江戸時代中期以前の史料では存在が確認できない。慶長期の開鑿は、葎ヶ淵堤および横捲り堤以北で、それより下流は往時の金山沢の自然流路を流末として利用したものと考えられる。

6. 新煤鼻川の開鑿と甲州流の治水技術との関係

慶長期は、近世日本の都市・産業基盤が全国的に確立された時代で、大開発は川中島平に限ったものではない。しかし、なぜ奥信濃のこの地で大規模な開発が可能であったのか。松平忠輝は長沢松平家を継いだ形になっているが、元来徳川家の分家であるから家臣団の多くは徳川家からの移籍組である。この家臣団が形成されるまでの間は、幕府の惣代官大久保長安が忠輝の知行地となった川中島四郡の経営に直接係わっていたことは多くの人が知るところである。

忠輝は慶長8年2月に川中島城主に封じられたが、しばらくは江戸にいた。それまでこの地を領していた森右近大夫忠政が美作国津山に移封された後、城番として諏訪城主諏訪頼水らが川中島を守備していた。11月には長安が松城に赴き、彼の手代である雨宮治郎右衛門忠良、平岡岡右衛門道成(松雲斎)、平岡帯刀良知(竹雲斎)、窪田忠兵衛昌満らに城が明け渡された²³⁾。これら大久保長安を筆頭とする代官衆は、旧武田家の遺臣で、天正10年(1582)武田勝頼が織田信長に滅ぼされた後に家康に仕官した甲州系代官たちである。彼らは武田家臣時代には蔵前衆と呼ばれる地方(じかた)巧者であった²⁴⁾。

松城とは、武田信玄(晴信)の信濃侵攻の最前線の拠点であった海津城のことで、その築城は永禄2年(1559)から開始され、翌年には完成している。この城代は、高坂弾正(春日虎綱)で郡代的権限を持っていた。大久保長安は青年期には、18才年上の高坂弾正に大きく影響を受けていたものと考えられる。蔵前衆であった長安は、度々海津城に赴き高坂弾正と親交があったものと思われる。そのためか、忠輝の付家老となって松城に赴いた長安は、高坂弾正の菩提所である松代明徳寺に高坂弾正の恩顧に報いるためとして20石を寄進している²⁵⁾。また、平岡道成、良知兄弟の母親は高坂弾正の妹といわれる。

高坂弾正は、武田信玄の近習として使え生涯武田家臣団の中核にいた人物であり、武田信玄が行った御勅使川、釜無川の治木工事をよく知る人物の一人であったと想像できる。川中島平の経営を任された弾正には、当然、煤鼻川や犀川の治水に関する構想ができていたものと思われる。しかし、当時の川中島平は、上杉謙信との戦いの軍事境界線上に位置していたため、それらの構想を実現する状況にはなかった。青年期に弾正の影響を受けたであろう長安や平岡兄弟は、この弾正統治時代に想起された煤鼻川の大開発計画を知っていたものと考えられる。

忠輝の川中島移封を実現した長安は、直ちに配下の甲州系代官を川中島に赴任させ、煤鼻川の開発に着手した

ものと考えられる。これには甲州流の治水技術を熟知した甲州の川除衆も動員されたことであろう。

平岡甲州系代官が発した文書は慶長10年以降忠輝の知行地内にみられない。このように甲州系代官が活躍した期間は2年に満たないが、慶長16年に開設された北国街道丹波島善光寺宿ルートが旧煤鼻川氾濫地域を北上して善光寺表参道を形成していることから、慶長10年代の早い時期に新煤鼻川の治水機能は確立されていたと考えられる。慶長9年以降、忠輝の家臣団が機能し始め、花井吉成・主水親子は甲州系代官らが着手した煤鼻川の開発を引き継いだと思われる。

旗手²⁶⁾は、近世初頭に中部山岳地帯を中心に展開された扇状地の河道付け替え手法の特徴として次の点をあげている。第一は、溪谷を下り切った扇頂部で河道を人為的に付け替え、扇央部の洪水の直進を防ぎ、かつ扇央部の旧河道を用水路として整備して、扇央部の耕地利用の高度化を図っている点。第二は、田用水の取水法で、溪谷の自然護岸の末端で河道がまだ固定されていて、かつ流水が扇状地内に伏流化する前で、流量が豊富な地点である扇頂部に堰を設け取水する方法をとる点である。そして、これらは甲州流の治水技術の特徴としている。

再度図-2を見ると、煤鼻川は白岩と称される地点で流向を右に折り河道を犀川に短絡させて、旧河道を用水路として利用している。このような特徴は武田信玄が行った釜無川竜王の川除けにも認められる。図-10に釜無川の下流部の流路を示した。御勅使川の流勢を赤岩（高岩）で受け釜無本流と合流させた後、竜王の鼻の先端で流向を右に折り南流させて笛吹川と合流させている。

つづいて用水路の取水法を見ると、煤鼻川左岸は最上流部の鐘ヶ瀬と呼ばれる河岸段丘と待居堤との接続部で、鐘鋳堰と八幡山王堰が取水されている。また右岸の窪寺堰もまた白岩と勝手沢北堤の接続部で取水されていた。

釜無川左岸における取水も同様な特徴を有する。赤岩の南端の竜王の鼻と信玄堤の接続部で竜王用水を取水し

ている。この構造は初期の信玄堤で実現されていたと考えられるが、さらに寛永～慶安期（1624～1651）には甲府郡代平岡和由、良辰父子が赤岩に図-11に示した取水用の隧道を開鑿して用水供給の安定化を図っている²⁸⁾。この和由は、煤鼻川の大開発に関わりをもった平岡帯刀良知（竹雲斎）の子である²⁹⁾。良知は元和5年に甲斐にて没し、その家督を和由が継いでいるが、良知が煤鼻川に関わったと考えられる慶長8～9年ごろには、和由は20歳となっていたことから、和由もまた煤鼻川の開発を良く知る人物の一人であったと思われる。

第三の特徴は霞堤の配置にある。煤鼻川右岸開発地域の南端に窪寺村差出組が存在する。ここは、朝日山山麓から流下する金山沢が発達した扇状台地を造成している。図-12で見ると、この扇状台地の裾に氾濫戻しの機能を有する葎ヶ淵堤を配置し霞堤を形成している。また対岸の上流にも横捲り堤と称される霞堤が配置されている。この構図は図-13に示す、笛吹川の難所に築かれた万力堤と酷似している。

山梨市万力付近では、笛吹川の流路を固定するために、右岸に存在する差出の磯と呼ばれる断崖に流向を当てている。この下流に万力堤と称す霞堤を作り、下流域の農耕地を守っている。この差出の磯の上流には、右岸山麓より流下する兄川が合流している。このように煤鼻川、笛吹川共に本流を右岸の高台に当てるとともに、そこに支流の合流処理機能も含めた霞堤を配置し下流域の氾濫を防御しているのである。笛吹川は、天正11年（1583）に大きな水害を被っている。このとき徳川家康により万力堤とその防護林である万力林が整備された³⁰⁾。この災害復旧には、家康に任官されて間もない長安以下の甲州系代官の多くが動員されたものと考えられる。その彼らが20年後に煤鼻川右岸の地を見たとき、差出の磯をイメージした可能性は大きい。差出地名は全国的に稀で他に例がない地名である。窪寺村差出の名は、煤鼻川の開発に赴いた甲州系代官により命名されたものと考えてみたい。

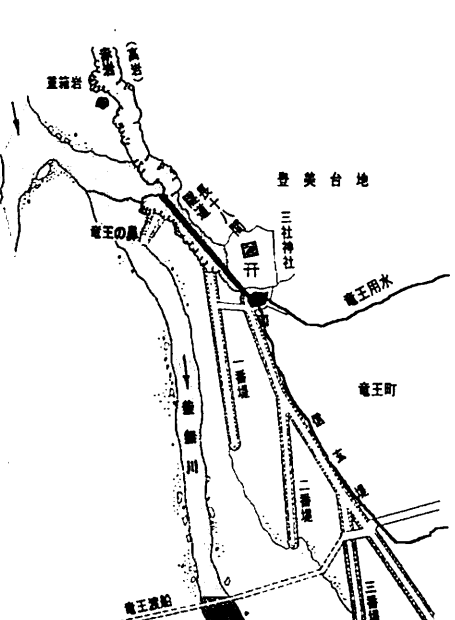


図-10 武田時代の釜無川の治水技術（明治43年発行国土地理院旧版地図に筆者加筆） 図-11 竜王用水の取水法（中村²⁸⁾に筆者加筆）

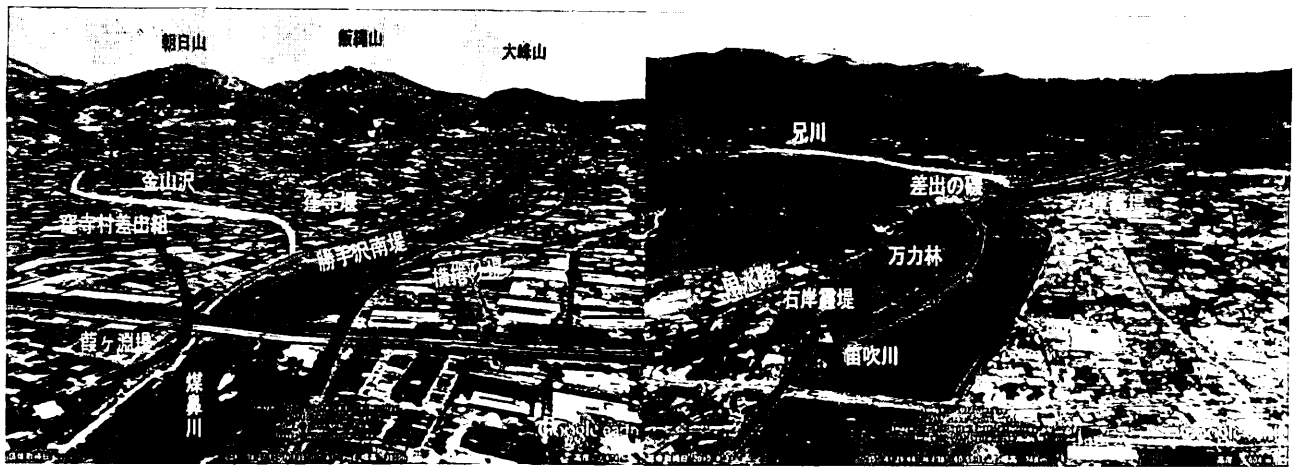


図-12 煤鼻川の差出組 (Google earth 独自機能画像に筆者加筆) 図-13 笛吹川の差出の磯 (Google earth 独自機能画像に筆者加筆)

7. まとめ

以上述べたことをまとめて本稿の結論とする。

- ① 煤鼻川の開発は慶長7年の右近検地の後から慶長19年の間に実施された。そして北国街道丹波島・善光寺宿ルートが開設された慶長16年以前に河道の付け替え工事は完成し、煤鼻川旧氾濫域の治水（洪水）対策は機能していたものと考えられる。
- ② 岡田村は新設河道敷に供され、右岸側残地は小柴見村北組に、左岸側残地は中御所村岡田組に組み入れられた。小柴見村北組の村民は、その後190年間にわたり中御所村の笹焼明神の氏子であったことで、開発以前は両組が一村であったことが判る。
- ③ 煤鼻川右岸の窪寺堰は、交差する二本の沢の流路を付け替え、底樋構造による立体交差や、控え堤の役割を持つ盛土の上に整備されたもので、煤鼻川の開発は兩岸の用水路の整備も含めた河川開発事業であった。これらは、慶長19年までに整備されていた。
- ④ 煤鼻川と釜無川の河川構造には次の類似点がある。第一点は、河道を扇状地の扇頂部で流向を右に折り河道を固定するとともに、扇状地内の流路長の短縮と、旧河道の耕地利用の高度化を図っている。第二点は、田用水の取水法で、扇頂部の溪谷末端の自然護岸と川除け堤との接続部で取水をしている。
- ⑤ 煤鼻川右岸の霞堤構造は、笛吹川の万力堤の河川構造と酷似している。窪寺村差出の地名は、万力堤上流の差出の磯に因んで命名されたものと推測する。
- ⑥ 新しく開鑿された煤鼻川は、左右両岸に二線堤構造と下流域に霞堤を持つ甲州流の治水技術の流れを汲む技術により整備されていた。これらには、大久保長安、平岡良知らの甲州系代官が深く関与していたものと考えられ、その後を継いでこの大開発事業を完成させたのが花井吉成、義雄父子であると考えられる。

このように煤鼻川の開発は、善光寺平の農業基盤確立のための利水対策と、善光寺門前南方地域を乱流した煤鼻川の治水対策が目的であったものと推定でき、ここに善光寺の表参道となる北国街道丹波島・善光寺宿ルートが開設されたことにより、近世善光寺門前町の都市基盤の確立につながったものと考えている。

参考文献

- 1) 上水内郡教育部会：『旧町村誌，5巻』，pp. 36～40，1934.
- 2) 藤田延雄：『下堰沿革史』，下堰改良区，pp. 17～20，1958.
- 3) 長野市誌編纂委員会：『長野市誌，第三巻近世一』，pp. 33～37，pp. 70～75，pp. 662～669，2001.
- 4) 信濃史料刊行会：『信濃史料叢書第11巻』，pp. 192～199
- 5) 前掲 4，pp. 216～223
- 6) 宮島治郎右衛門：『ふるさとの歴史』，宮島家，pp. 5～6，1965.
- 7) 長野市誌編纂委員会：『長野市誌，第八巻』，pp. 79～82，2001.
- 8) 前掲 6，pp. 47～48
- 9) 前掲 6，pp. 7～8 宮島家文書：寛永の名寄帳
- 10) 前掲 1，pp. 74～85
- 11) 安茂里史会編纂委員会：『安茂里史』，安茂里史刊行会，1995.
- 12) 長野県行政文書：明治20年道路河川堤塘取調帳，長野県立歴史館所蔵
- 13) 長野県行政文書：明治33年裾花川平面図，長野県立歴史館
- 14) 真田家文書：明治4年中御所村・久保寺村堤川除普請所絵図，人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵
- 15) 村田家文書：文政期御普請所絵図，小柴見区村田家
- 16) 村田家文書：文化7年和談成立絵図，小柴見区村田家
- 17) 建設省土木研究所：『霞堤の現況調査報告書』，土木研究所資料，vol. 2286，pp. 2～5，1986.
- 18) 浜口達男 et al.：霞堤の全国実態と機能，土木技術資料，29-5，pp. 21～26，1987.
- 19) 長野市誌編纂委員会：『長野市誌，第13巻』，pp. 787，2001.
- 20) 浦野家文書：嘉永5年煤鼻川妻科村分地龍王ヨリ屋川落合久保寺村ノ内米村迄絵図面，長野市立博物館所蔵
- 21) 真田家文書：宝暦6年久保寺村絵図，人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵
- 22) 三戸部家文書：煤鼻川並御料私領絵図，栗田区三戸部家
- 23) 前掲 3，pp. 23～29
- 24) 村上 直：近世初期甲州系代官衆の系譜について，『日本近世の政治と社会』，吉川弘文館，pp. 2～41，1980.
- 25) 松代史跡文化財開発委員会：『つちくれ鑑』，pp. 21，1994.
- 26) 玉城哲，旗手勲：『風土～大地と人間の歴史』，平凡社，pp. 190～198，1974
- 27) 西川広平：川除普請と村落，『信玄堤の再評価』，信玄堤の再評価実行委員会，pp. 92，2004.
- 28) 中村正賢：『武田信玄と治水』，山梨県林業研究会，pp. 63～66，1965.
- 29) 中島次太郎：『松平忠輝と家臣団』，名著出版，pp. 46～48，pp. 207～209，1975.
- 30) 広瀬廣一：『山梨県土木建築史』，山梨県土木建築請負業組合，pp. 62～66，1935.